

入選

水上 夏菜子（みずかみ ななこ） 由木中 1年生

作品名:「青春は夢を叶えるために」

図 書:明日につづくリズム

「明日につづくリズム」という本。

この本に出会ってから、私は少し変わることができた気がする。最初、この本と出会った時に、この本が何か、私に訴えかけてきた。何度も読んでいるうちに、はっきりと本の声が聞こえてきたのだ。

「夢を、あきらめてはだめ」

と。その言葉に、私は、はっと胸をつかれた。

この本は、キラキラと光っている、青春の物語だと思う。少女達の心の中の思いが、何だかとても新鮮で、色々なことがひしひしと伝わってきた。主人公の気持ちが、自分に重なっていて、読み進めている時に、とても驚いた。

この物語は、因島という所が舞台になっている。主人公の千波とその親友である恵は、中学3年生。青春真っ盛りの毎日を送りながら、夢、家族、友情などといったことに、悩み、とまどい、やがて自分で答えを見つけ、大人になっていく。

私が一番、千波の思いに共感した所は、やはり、「夢についての悩み」だ。

小学生の時、私の夢は、小学校の教師になることだった。子供達に楽しく勉強を教えたり、一緒に遊んだりしてみたい、と思っていた。でも、中学生になってからは、現実を見るようになり、「私はとても引っ込み思案だから、小学校の教師には向いていないのかな…」と考えるようになった。母は、「あなたは本が大好きだから、出版社で本に係わる仕事をしたらいい。」と推めてくれていた。本も大好きだからそれでも良いかな、と思っていたが、やはり教師の夢を、あきらめたくはないと、悩んでいたのだ。

千波も、進路で悩んでいた。千波も私と同じで、本が好きなので、いつか作家になりたい、と決意をして、文芸部がある島の外の高校に進学したい、と思っていた。しかし、母に、お金がかかると反対され、母とけんかをしている時に、千波の家に火事が起きてしまう。幸い、千波は学校にいて助かったが、母は弟の大地をかばい、

背中に大火傷をおって病院に運ばれた。千波は優しいので、母に負担をかけたくないと、決意の気持ちが、揺れるのだ。

私はそこで、千波には絶対に夢をあきらめてほしくないと思った。せっかく「作家になる」と決意したのに、そこでやめてしまったら、後で絶対に後悔を思う。青春時代に一生懸命努力をすることがなくなったら全く楽しくなくなってしまうと思うのだ。そう思った時、なぜか自分の中に重いものがずっしりと落ちてきた気がした。そして、私はようやく気がついた。自分も千波と同じではないか。青春は、夢を叶えるためにあるのだ、私も夢をあきらめたくないと。

その後千波は、母が気持ちを理解してくれて、島の外の高校を受験することが決まり、夢に一步近づけた。よかった。私もそうやって、少しずつでも良いから、小さなことをコツコツと積み重ね、夢へと近づきたいと思った。

千波は、夢を叶え、作家になれたのだろうか。私は絶対になれていると思う。彼女は夢を、あきらめなかったからだ。

私も、夢をあきらめずに、小学校の教師になりたい、と改めて決意した。確かに今の私は引っ込み思案だ。自分の思っていることを話すのは得意ではない。けれども、自分の性格は変えていける。なぜなら私には、夢があるから。この先どんなことがあっても、夢を絶対、叶えたいと思う。